佐古純一郎（さこ じゅんいちろう）

1919年，徳島県に生まれる。
二松学舎専門学校，日本大学法文学部宗教科卒業。
現在，二松学舎大学教授，日本基督教団中渋谷教会牧師。
著書 『佐古純一郎著作集』全8巻，『現代人は愛しうるか』，『親鸞』，『芭蕉』，『宗教と文学』，『真実なる対話を求めて』，『生きる意味について』，『新しい人間像を求めて』，『純粋の探求』。

椎名麟三と遠藤周作

1977年2月28日　初版発行

© 佐古純一郎　1977

著　者　佐古純一郎

発行所　日本基督教団出版局

〒160　東京都新宿区西早稲田2丁目3の18
振替東京8-145610　電話（202）0541(代)

印刷　三秀舎　ケース印刷　伊坂美術印刷　製本　市村製本所

0016-620153-6100（日キ版）

佐古純一郎

椎名麟三と遠藤周作

椎名麟三と遠藤周作＊目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

椎名麟三と遠藤周作——序に代えて——　9

I　椎名麟三

椎名麟三論　23
椎名麟三の人と文学　41
椎名麟三の世界　69
椎名氏と「たねの会」　106
『美しい女』について　112
『私の聖書物語』について　127
対談「自由を求めて」椎名麟三×佐古純一郎　135

II　遠藤周作

遠藤周作論序説　151
遠藤周作とカトリシズム　167
芥川龍之介から遠藤周作まで　181

『沈黙』について 188
ぐうたらとキリスト教 197
原体験としての留学 202
『黄色い人』について 213
『海と毒薬』について 218
『青い小さな葡萄』について 228
『影法師』について 237
対談「現代の献身」遠藤周作×佐古純一郎 243
あとがき 257
初出誌一覧 259

装丁　熊谷博人

椎名麟三と遠藤周作

椎名麟三と遠藤周作

——序に代えて——

一

わたしはやつとこの頃になって四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年たちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生れたわたしは彼等のもう見るのに飽きた——寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。

これはいうまでもなく『西方の人』の冒頭の「この人を見よ」の文章であるが、このように「キリスト」に対する心を語ってから芥川龍之介は、「わたしは唯わたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記す」のだといって、彼のキリスト観を展開しているのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

わたくしは、ここで、芥川のキリスト観が信仰的に正しいかどうかというようなことを批判するつもりはない。それよりも、芥川が「わたしのクリスト」というモチーフにおいてキリストを観ようとしていること、それから、「十字架に目を注ぎ出した」といって、イエスの十字架の意味に関心していることに注意したいのである。信仰の基準に照らして芥川のキリスト観がいかにまとはずれのものであったとしても、人が、「わたしのキリスト」という姿勢でキリストを愛するということ、そうして、「十字架に目を注ぐ」という関心性においてキリストを観るということはまことに正当なキリストへの接近の仕方ではなかろうか。

芥川が『西方の人』を書きあげたのは、昭和二年の七月十日であった。それは雑誌の締切日が迫ったためだというのだが、彼はまだ書き足りないという不満を抱いていたらしく、「もう一度わたしのクリストを描き加へたい」といって、さらに『続西方の人』を書いたのである。「誰もわたしの書いたものなどに――殊にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない」と芥川は書いているが、彼が『続西方の人』の最後を書きあげたのは、まさしく彼が自裁した七月二十四日の午前一時頃と推定できることから考えて、芥川はその死の直前の二週間を、聖書に、読み入りつつ、自分に呼びかけてくれるキリストに心を傾けていたといえるのであろう。

文子夫人の談によると、芥川は昭和二年の七月二十四日の午前一時頃に、『続西方の人』を書きあげて、階下の寝室に降りてきたという。「いつもの薬を飲んできた」といったようであるが、毎夜のように睡眠薬を飲んでいたことでもあり、夫人はかくべつにあやしまなかったのであろう。しかしその時芥川は致死量の睡眠薬を飲んでいたのである。その芥川は、聖書を小脇にしており、寝床に入ってからも聖書を読みつづけていたという。やがて聖書で顔をおおうようにして眠りについたと夫人は証言している。

少しくクイズじみて恐縮であるが、わたくしは、いったい芥川は、死を前にして聖書のどこを読んでいたろうか、と空想をたくましくいたしたいのである。わたくしの答えは、それは「ルカによる福音書」二十四章のエマオの旅人のくだりではなかったろうかということである。もちろんわたくしの勝手な空想であるが、拠り所はこうである。『続西方の人』を芥川はつぎのように結んでいたのである。

我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

これは文字どおり芥川龍之介が地上にのこした最後の文章である。つまり芥川は、エマオの旅人のように、復活のキリストとの出会いをそのゆくてに望みつつ自らその生涯の幕を閉じたということができるであろう。

「十字架」に目を注ぎつつそのキリスト論を始めた芥川は、「復活のキリスト」を望みつつそれを

閉じたのである。そうして、わたくしは、芥川がこのように指さした「十字架と復活」のイエス・キリストとどう出会うか、という課題こそが、「芥川以後」としての現代日本文学における「キリスト」の根本問題であったと考えるものである。

二

芥川龍之介においては、キリスト教はまだカトリックだかプロテスタントだか分明でないところがあり、そこに芥川のキリスト教受容の観念性があったともいえるのであろう。現代日本文学の潮流において、それをプロテスタンティズムの方向に受け継いだのが、太宰治から椎名麟三への流れであったし、それをカトリシズムの流れにおいて継承したところで、堀辰雄から遠藤周作へという歴史があったというふうに考えることができるのではあるまいか。

椎名麟三が「キリスト」との出会いを経験したのは、まさしく芥川が望んだエマオ途上の旅びととしてであった。『私の聖書物語』において椎名氏はその経験をつぎのように語っている。

「その日彼は机に向って聖書を読んでいた」というわけであるが、「勢よく三番目の福音書であるルカ伝の復活のくだりをあけた」……さて、

「ふたりの弟子が、エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村へ行くとき、そのふたりへ死んだイエスがあらわれたんだな。」

と、彼は神妙そうに読んでは考えた。「よろしい。そのふたりの弟子はエルサレムに帰って十一弟子とその仲間に話したんだな。十一弟子だって？　ああ、そうか、十二弟子のうちユダはイエスを裏切って首をくくって死んじゃったのか。なかなか計算が行きとどいている。そこへイエスがまたあらわれたんだな。きっと真裸じゃおかしいから、やっぱりあのユダヤのダラリとした白衣を着ていたにちがいない。ふむ、自分は霊じゃない、嘘だと思うなら、自分の手や足を見てくれ、さわって見てくれ、霊に肉や骨はないが、わたしにはあるのだって？…よろしい、イエス君、そんなにいうのなら見てあげよう。」

そうして、彼は、弟子やその仲間へ向ってさかんに毛脛を出したり、懸命に両手を差しのべて見せているイエスを思い描いたのである。ひどく滑稽だった。だが、次の瞬間、そのイエスを思いうかべていた頭の禿げかかった男は、どういうわけか何かドキンとした。それと同時に強いショックを受け、自分の足もとがグラグラ揺れるとともに、彼の信じていたこの世のあらゆる絶対性が、餌をもらったケモノのように急にやさしく見えはじめたのである。彼は、その自分が信じられなかった。あまり思いつめていたので気ちがいになったのかも知れない気がした。彼は、あわてて立ち上って鏡へ自分の顔をうつして見た。だが、それはまるで酔っぱらっ

たように真赤にかがやいていて、何かの宝くじにでもあたったような実に喜びにあふれた顔をしているのであった。彼は、その鏡のなかの顔を仔細に点検しながら友情をこめて言った。

「お前は、バカだよ。」

しかし、不思議なことには、その鏡のなかの顔は、そういわれてもやはり嬉しそうにニコニコしていたのであった。

「これが私の回心の物語である」と椎名氏は書いている。大変に文学的な調子で表現されているがゆえに、これだけでは椎名氏の経験が具体的にどのようなものであったのかを了解することは必ずしも容易でないかもしれない。しかし、この原初経験は、それ以後、椎名氏の実存に根源的な力として生きて働いたことだけはたしかである。してみれば、椎名氏は、芥川が指さした、エマオ途上の出会いとして、復活のキリストとの邂逅を経験したのであった。

たとえば、『美しい女』は、椎名氏がその信仰的実存として経験した復活のキリストとの出会いのうちにいかに自由を生きるか、ということを小説として形象化した試みであった。それが氏の願いどおりの成果を収めることができているかどうかは、論者によって判断を異にするかもしれないし、椎名氏自身も必ずしも満足はしていなかったように思われる。方法的にいって、復活のキリストを文学的に形象化するということは、それほど容易なことではない。とくに、伝統の浅い日本の文学（キリスト教との関連において）の場合その困難さはさらに深いのである。

三

そういう点において、遠藤周作氏のいくつかの作品は注目に値するであろう。たとえば『死海のほとり』『イエスの生涯』のごときは、小説と評論の形で、氏が直接的にイエスを描こうとしたまことに大胆な試みであった。

しかし、遠藤氏においては、どちらかといえば、地上にありたもうた「イエス」についての関心として表現がなされていることを見逃してはならないであろう。やさしいまなざしをもって、病める人や、貧しい人々を凝視する愛のイエス、同伴者イエスとして、イエス像が構築されるところに遠藤氏の特色があるといえよう。しかし、遠藤氏が、作品としてイエス像を描くとき、芥川のいわゆる「わたしのイエス」という主体的モチーフが強く働いていることを無視してはならない。『死海のほとり』の「私」はつぎのようにいうのである。

私は大学の時に入信した戸田とちがって、小さな時に洗礼をうけた男である。自分の意志でなく親から一つの宗教を選ばされたというのは後に私の心に重荷となり、幾度も棄てようとしたものだ。そのくせ棄てたあと、自分がどうなるのか、何をするのか自信もなく、心の奥でこの矛盾に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook